

平成26年度事業報告

1. 会議の開催について

(1) 理事会の開催

第1回 平成26年 6月 2日

第2回 平成27年 3月10日

(2) 常務理事会の開催

第1回 平成26年10月20日

第2回 平成26年12月 3日

(3) 評議員会の開催

第1回 平成26年 6月19日

2. 事業の実施について

自主研究

○医療政策研究会

- (1) 『院内事故調査の手引き』の改訂のための検討会 全体読み合わせ及び第1章の検討見直し。医歯薬出版（岩永氏）打合せ
平成26年 4月24日
- (2) 『院内事故調査の手引き』の改訂のための検討会 第2章の検討見直し。
平成26年 5月24日
- (3) 『院内事故調査の手引き』の改訂のための検討会 第3章の検討見直し。
医師法21条についての解説及びアルゴリズム
平成26年 6月 7日
- (4) 『院内事故調査の手引き』の改訂のための検討会 第4章の検討見直し。
平成26年 7月 4日
- (5) 『院内事故調査の手引き』の改訂のための検討会 第5章の検討見直し。
平成26年 8月 6日
- (6) 『院内事故調査の手引き』の改訂のための検討会 第6章の検討見直し。
平成26年 9月11日
- (7) 『院内事故調査の手引き』の改訂のための検討会 第7章の検討見直し。
平成26年11月 4日
- (8) 『院内事故調査の手引き』の改訂のための検討会 第8章の検討見直し。
平成26年11月25日
- (9) 『院内事故調査の手引き』の改訂のための検討会 第9章の検討見直し。
平成27年 1月27日
- (10) 『院内事故調査の手引き』の改訂のための検討会 第10章の検討見直し。
平成27年 2月12日

(11) 『院内事故調査の手引き』の改訂のための検討会 第11章の検討見直し。

平成27年 2月17日

(12) 『院内事故調査の手引き』の改訂のための検討会 第12章の検討見直し。

医歯薬出版岩永氏も交え、出版期日の打合せをする。

平成27年 2月26日

(13) 『院内事故調査の手引き』の改訂のための検討会 第13章の検討見直し。

平成27年 3月 4日

10年来の検案事項となっていた医療事故調査制度が法制化され、平成27年10月に施行されることになった。そこでも院内における事故調査が基本になる。そのため、医療政策研究会においても、これまでに出版していた『院内事故調査の手引き』の改訂を法改正に沿って早急に改訂する必要が生じた。

第8回の研究会においては、医療事故調査制度の立ち上げの中心的役割を担った厚生労働省医政局の大坪寛子氏が急遽研究会に参加して、相互にあるべき医療事故調査についての意見交換を行った。

○ 地域口腔医療研究会

(1) 研究ノート作成に向けての構想を検討

平成26年 7月15日

(2) 豊島区口腔保健センター「あぜりあ歯科診療所」主任衛生士との意見交換

平成26年 9月 2日

(3) 豊島区歯科医師会 専務理事との研究ノート事実確認作業

平成26年11月18日

(4) 研究ノート構成修整のための意見交換

平成27年 1月14日

(5) 研究ノート最終校正

平成27年 1月20日

(6) 「認知症をめぐる2, 3の話題」

平成27年 3月26日

東京都健康長寿医療センター

松下 正明

概要：地域口腔医療研究会3年目は、研究ノート「終末期医療における歯科の係わり」の製作に費やした。事実確認は担当メンバーが行ない、構成及び校正はメンバー全員で意見出し合いながら研究ノートを仕上げた。今回の研究ノートには認知症に関し深く切り込むことが出来なかった。今後の課題として、講師を招き認知症に関する検討行なった。

○患者・医療者・社会の権利に附随する諸問題について考える研究会

(1) 平成24-25年度の各項目並びに問題点の確認

平成26年 4月25日

(2) 川崎安楽死事件： 安楽死法案、臨床現場の状況、医療倫理観

平成26年 5月23日

(3) オランダ医療契約法、ヨーロッパにおける医療契約法

平成26年 6月27日

(4) リスボン宣言の患者の権利の、医療機関での利用例（紀州病院）と立法化の動き

平成26年 7月24日

(5) 米国で最初の「患者の権利章典」

平成26年 9月 4日

(6) 医療保険契約締結時におけるインフォームド・コンセント

平成26年10月 2日

(7) 地域における住民の医療相談

平成26年10月31日

(8) 歯科におけるリスボン宣言の取り扱い

平成26年11月27日

(9) 最近の産業保健：メンタルヘルスの事案の増加

平成26年12月26日

(10) 医療法人の経営と税

平成27年 2月 5日

(11) 川崎協同病院事件に見る医療倫理と司法倫理

座長：安福 謙二 先生（福島県立大野病院事件弁護士）

講演者：矢澤 昇治 先生（川崎協同病院事件弁護士）

平成27年 2月 5日

(12) リスボン宣言の和英対比

平成27年 3月19日

特別講演会

概要：本研究会では、リスボン宣言（1981年世界医師会総会にて採択）での「患者の権利」を主要題材として、11種類の権利に附随する問題について言及し、改善策としての法やガイドライン等の修正案の検討し、研究発表等介して成果を見える形で社会に還元することを目的とし、様々な角度から医療を観察するために、医療以外のメンバーや学生にも参加してもらって活動を進めて来た。

科学が進歩し、高度医療による「生命の誕生や存続」に寄与する役割を担う医療行為は、長らく「善」であると認識されている。しかし、生命には限界があるのと同じに医療にも限界がある。また医療資源に限度があることも事実であって、その意味では、個人の最善の利益は必ずしも社会全体の最善の利益と一致しない場合もある。特に、医療や福祉は専門性も高く理解が難しいことに加えて、生涯でだれもが患者として関わりを持つ分野であることから、世間一般の関心も高く医療トラブルや訴訟も絶えない。

リスボン宣言制定から35年、少子高齢化が進む今、医療に対する期待も価値観も増々多様化してきている。「地域包括ケアシステム」作りには生命倫理・医療倫理・司法倫理の議論は必須である。人が自分らしく最期まで生きるためのwell-being（健康的に良い状態、

幸福な状態、安楽な状態) について、医療者だけでなく、患者やその家族、また社会全体で、一同に会して考えるべき「とき」が来たと感じる。本研究会の結果を論文にまとめると同時に、次の研究に繋げていけたらと考えている。

○ 先端医療技術倫理研究会

(1) 先端医科学技術の倫理的課題と展望

平成26年11月29日

九州大学病院特任講師

河原 直人

(2) 腎移植に関する倫理的諸問題—生体腎ドナー、レシピエントへのアンケート調査より—

平成27年 1月24日

日本大学教授

高木美也子

(3) 先端医療・先進医療・先制医療のアナトミー

平成27年 3月20日

仏教大学教授

村岡 潔

概要：本研究会は先端医療技術に関連する現場の研究者との対話により、倫理問題の所在を明らかにすることを目的として、平成24年度より開始した。本年度は3年目を迎え、最終年度となったため、これまでの研究会での議論を総合的に捉え直すために、先端医療技術研究の現場に近い立場からの議論を進めた。講演者としては、大学付属病院において研究倫理の専門家的立場から研究倫理審査や臨床研究指針に関するコンサルテーションなどを実践的に行っている河原氏、先端医療技術の倫理問題を検討する国の審議会のメンバーを歴任している高木氏、そして、医師としての臨床経験を背景として先端医療技術の医学思想史、医学概論の視点から研究をされている村岡氏に講演をお願いし、先端医療技術の研究と社会との接点における問題について提起していただき議論を行ってきた。ここでは、臨床研究に関する国の倫理指針の精緻化が進む中での研究倫理が国家的制度として成立してきていること、また、臓器移植などの現状において脳死下臓器移植と共に生体臓器移植も依然として多く我が国では行われていること、そして、先端医療技術が近年では予防医学の領域で新たに先制医療として展開されていることなどが取り上げられ、その技術的発展と共に、いわゆる ELSI (倫理的、法的、社会的問題) の検討の重要性がますます高まっていることが示された。本研究会の成果は今後報告書などにまとめ、また、講演と討論の内容を基にした論文集を発表したいと計画している。

○ 「代替医療と語り」研究会

(1) 音楽療法とかたり：神経心理学的視点から～

平成26年 7月17日

三重大学大学院医学系研究科・認知症医療学講座 准教授 佐藤 正之

(2) チャプレンと語り—スピリチュアルケアの視点から—

平成26年 9月 3日

聖学院大学大学院 教授

窪寺 俊之

(3) 戦前・戦時期における「衛生経験」の語り—近代医学と民間医学—

平成26年9月19日

お茶の水女子大学・リーダーシップ養成教育研究センター 宝月 理恵

(4) がん患者から見た日本のがん医療の問題点－漢方によるがん治療体験記から－

平成26年10月17日

がん研有明病院漢方サポート科 部長

星野恵津夫

(5) NBMにおけるnarrativeと語り－西洋と東洋の言語から－

平成26年12月10日

東京薬科大学名誉教授 / 全時統合医療研究所所長

志田 信夫

○高齢者、障害者などの生存に関わるユニバーサル・ヘルス・ケアと福祉・社会保障の研究

(1) 最近の精神障害・保健の地域活動と福祉・社会保障政策との関わりについて

平成26年 4月18日

社会福祉法人江古田明和会(クオリティケア出版)

鴻森 和明

(2) 尊厳について

平成26年 5月26日

英国サリー大学教授・看護倫理学

Ann Gallagher (通訳 松田)

(3) 災害時における市町村保健師の活動体制－危機管理部門に配属されて－

平成26年10月31日

静岡県牧之原市総務部危機管理課・総括主任保健師

古川 馨子

(4) 東日本大震災からの復興－被災地での栄養指導、保健指導、公衆衛生上の課題について

平成26年11月13日

福島県南相馬市健康づくり課

大石万里子

(5) 特別講演：災害時の高齢者、障害者等の生存に関わるユニバーサル・ヘルス・ケアと福祉

平成26年12月 5日

ベトナム・ホーチミン市 Pham Ngoc Thach 医科大学看護医療技術学部

ASEAN 地域連合の関係大学による第1回国際看護会議で松田が行った。

(6) 医療介護総合確保法と医療・介護提供体制の見直しについて

平成26年12月23日

大津市役所健康長寿課

西本 美和

(7) 高齢者、障害者等の生存に関わるユニバーサル・ヘルス・ケアと福祉・社会保障の研究の動向と課題

平成27年 3月 7日

概要：本研究の目的は、国内のみならず国際的に増大している高齢者、障害者等の生存に関わるユニバーサル・ヘルス・ケアの動向を、総合的に捉えることにある。グローバル化が進展し、変動する社会経済環境を、社会医学・保健科学・看護学・情報科学・社会学など、多角的な視野から、人類の福祉・社会保障環境など生存科学に関する研究を推進する。

2年度は、初年度で構築した研究体制を維持し、国内外の関連情報の収集と生存科学との関連性の分析を続けた。高齢者、障害者に焦点を絞り、わが国の高齢者、障害者の保健福

社制度の動向や災害の影響とその意味するところを過去・現在・将来という時間軸で捉え、精査した。また、海外のユニバーサル・ヘルス・ケアに関する動向が意味するところを、英国における患者の尊厳等、から検討した。

○動物の社会構造における精神疾患関連行動の意義

(1) グループ飼育されているニホンザルを用いたドーパミン機能の社会的影響解明に向けた実験

平成26年4月1日～平成27年3月31日

京都大学霊長類研究所准教授

後藤 幸織

大邱カトリック大学食品栄養学科助教

李 英娥

京都大学霊長類研究所前期博士課程

山口 佳恵

概要：本研究では、ニホンザルを動物モデルとして、ヒトの社会行動ならびに精神疾患を進化論的視点から解明を試みるものである。集団飼育下のニホンザルを用いて、そのうちの1頭にドーパミン受容体の1つであるD1受容体の阻害薬を慢性投与することにより誘起される行動変化が、集団内の動物の社会関係性ならびに社会構造（社会階級など）がどのように変化するのかを調査した。その結果、D1受容体機能の異常は、従来の研究では認知機能不全を起し、また、精神疾患との関連も示唆されているが、社会集団内で生活するニホンザルに対しては、明確な不利益的な変化は観察されなかった。このことから、ある社会的文脈においては、精神疾患と関連するような脳機能の異常というものは必ずしも進化の過程で淘汰されない可能性が見いだされた。

○児童虐待に対するソーシャルワークの国際比較研究会

(1) ボーンマス市CSW（認定ソーシャルワーカー）と児童虐待に対するソーシャルワークに関する討議

平成26年9月23日（ボーンマス大学・会議室）

川崎医療福祉大学 教授

熊谷 忠和

川崎医療福祉大学 講師

直島 克樹

川崎医療福祉大学 講師

Tim Cleminson

(2) ボーンマス大学 Jill Davey 教授と国際的にみた児童虐待に関する討論

平成26年 9月23日（ボーンマス大学・会議室）

川崎医療福祉大学 教授

熊谷 忠和

川崎医療福祉大学 講師

直島 克樹

川崎医療福祉大学 講師

Tim Cleminson

(3) ボーンマス大学 Richard Williams 教授とアドボカシーに関する討議

平成26年 9月23日（ボーンマス大学・会議室）

川崎医療福祉大学 教授

熊谷 忠和

川崎医療福祉大学 講師

直島 克樹

川崎医療福祉大学 講師

Tim Cleminson

(4) ロンドン大学 Institute of Education Thomas Coram Research Unit の Emily Munro 教授と児童保護のアフターケアの国際比較に関して討議

平成26年 9月25日 (Emily Munro 教授の研究室)

川崎医療福祉大学 教授	熊谷 忠和
川崎医療福祉大学 講師	直島 克樹
川崎医療福祉大学 講師	Tim Cleminson

(5) 日本の児童保護に関する状況、特にリービングケア (Leaving Care) について英文論文作成作業

平成26年10月1日～平成27年3月31日

川崎医療福祉大学 教授	熊谷忠和
川崎医療福祉大学 講師	直島 克樹
川崎医療福祉大学 講師	Tim Cleminson

概要：平成26年度事業計画に基づき、当研究会メンバー（熊谷、直島、Cleminson）は、訪英し、ボーンマス大学 Centre for Social Work, Sociology & Social Policy の Prof. Jonathan Parker (Director) の実践家も含む研究チームと3回のセッション、ロンドン大学 Institute of Education Thomas Coram Research Unit の Prof. Emily Munro (Deputy Director) と1回の討議セッションを行った。

(1)については、ボーンマス市当局の児童家庭局局長 Stefan Kleipoedszus と現場のソーシャルワーカー2名とで、児童保護のプロセス、移行期の連携、アフターケア、ファミリーグループカンファレンスの実際について討議をした。(2)については、ボーンマス大学で児童ケアを専門としている Jill Davey 教授と、英国における児童虐待や国際的な児童保護活動について討議した。(3)については、ボーンマス大学で児童の権利を専門としている Richard Williams 教授と、特にアドボカシー (Advocacy) のプレゼンテーションを受けその後討議した。(4)については、Emily Munro 教授の著書「Young People's Transitions from Care to Adulthood: International Research and Practice」をベースに討議した。

さらに、(5)は、訪英の各セッションを踏まえ、帰国後、当研究会訪英メンバーを中心に週単位で討議し、英文論文「日本におけるリービングケア (Leaving Care) (仮題)」を作成した。

○自然を活かした防災・減災の研究

第3回国連防災世界会議「森の防潮堤」推進シンポジウム

概要：我々が目指している「いのちを守る森の防潮堤」は、いろいろな種類のふるさとの木々を市民の力により植えてつくられる自然に近い森によって、未来の子ども達の生命と財産と心を守る構想である。多層群落からなる森は「生命の塊」であり、多様性こそが持続可能の担保になる。コンクリート防潮堤は100年保つかどうか。

本年度は植物生態学、歴史、哲学、生物学、脳科学、森里海連環学、宗教など、さまざまな角度から検証し、いにしえから日本人が大切にしている自然と共に生きる多様性ある防災・減災のあり方について、第3回国連防災会議で「森の防潮堤」推進シンポジウムを開

催した。参加者は550名にのぼり、この会議では最多の参加者を得、国際的にも発信できる絶好の機会となった。詳細はシンポジウム開催の項に記載。

○社会歴史文化的要因を背景とするソーシャル・キャピタルとwell-beingに関する研究会
本研究会の目的は、近年、社会経済、健康科学分野において定着してきたソーシャルキャピタル(社会関連資本)について、特に、公衆衛生・健康科学分野から、多面的角度から講師の先生をお招きして、研究者間の共通の理解を図り、わが国の生存科学の進展のための広い内容の討論を行うことを意図している。さらに、本研究会は、地域を意識しており、特に社会経済的変遷が戦後、大きく推移した「沖縄」を主題として、沖縄在住の研究者にも半数近く参加していただいているところに特徴がある。本年も研究会を東京と沖縄で交互に行い、メンバーも可能な限り両方の開催場所に交互に参加していただいている。平成26年度の研究会は東京3回、沖縄2回、計5回にわたり、開催された。

(1) ソーシャルキャピタルとは何か

平成26年 9月19日

日本大学法学部教授

稲葉 陽二

(2) 社会疫学から見た母子関係におけるソーシャル・キャピタルー生物指標の可能性ー

平成26年12月12日

(独)国立成育医療研究センター 部長

藤原 武男

(3) 食育における科学的アプローチを考えるー児童に栄養・食事情報を、どのようにつたえるか?ー

平成27年 2月23日

東京大学大学院医学系研究科教授

佐々木 敏

(4) 人と在来家畜・ペットにおける幸福と社会関係資本

平成27年 3月13日

(財)進化生物学研究所・沖縄こどもの国施設長

高田 勝

ソーシャルキャピタルからみたペットと動物介在療法ー精神医学の見地から
自治医科大学精神医学教室

井上 かな

(5) 沖縄の建築業の若者と社会関係資本

平成27年 3月20日

特定非営利活動法人 社会理論・動態研究所講師

打越 正行

生活困窮者対策における社会的関係資本の重要性ー沖縄での取組から見えてきたこと
沖縄労働局 職業安定部長

國代 尚章

○資本主義研究会

(1) 資本主義と渋沢栄一の合本主義

平成26年 5月30日

コモンズ投信株式会社

渋澤 健

(2) 脳科学の視座から見た資本主義

平成26年 6月27日

株式会社日立製作所・役員待遇フェロー

小泉 英明

- (3) 幸運者生存という視点—ゲノム人類学の立場から—
 平成26年 7月25日
 北里大学医学部准教授 太田 博樹
- (4) リ資本主義と普遍
 平成26年 9月 4日
 東京大学東洋文化研究所 教授 中島 隆博
 評論家 大澤 真幸
- (5) 資本主義と良心
 平成26年10月30日
 一橋大学 教授 田中 一弘
- (6) 資本主義の終焉
 平成27年 1月16日
 日本大学 教授・経済学者 水野 和夫
- (7) 生命誌と資本主義
 平成27年 2月13日
 J T生命誌研究館 館長 中村 桂子
- (8) 資本主義と医療
 平成27年 3月12日
 祐ホームクリニック理事長・院長 武藤 真祐

助成研究

- (1) 心臓および心臓病に関する研究
- ①心房細動の発生及び維持における肺静脈心筋の機能的役割に関する実験的研究
 秋田大学大学院医学系研究科細胞生理学講座 尾野 恭一
- ②心肥大におけるアクチン動態とメカノセンシング機構
 九州大学大学院医学研究院生化学分野・講師 武谷 立
- ③心臓機能制御の臓器間ネットワーク：心房と心外膜脂肪組織の相互作用
 東邦大学医学部医学科生理学講座統合生理学分野教授 赤羽 悟美
- ④日米合同シンポジウム (JIKEI Symposium for Frontier in Cardiovascular Regulation and Regeneration) の開催
 東京慈恵会医科大学細胞生理学講座教授 南沢 享
- (2) 認知症・介護における心理社会的研究
- ①地域在住認知症高齢者のウェルビーイング
 東京都健康長寿医療センター研究所研究員 井藤 佳恵
- ②認知症家族介護者の介護負担感の特徴とその関連要因2
 東京都健康長寿医療センター精神科 臨床心理士 扇澤 史子
- ③「認知症医療・介護における法的問題について」
 上智大学法学部法律学科教授 奥田純一郎

④「若年性認知症に対する相談ツール」作成のための研究

いきいき福祉ネットワークセンター

駒井由紀子

⑤認知症医療・介護の心理・社会的研究—認知症の精神化訪問診療の限界を超えるための研究

海上療養所

上野 秀樹

⑥若年認知症の人と介護家族が参加する「仕事の間」のランチを県内に広げると共に障害を持った若者やニートや引きこもりの若者などの社会復帰の場にする試み

医療法人 藤本クリニック

藤本 直規

⑦知覚・感情・言語による包括的アプローチに基づくケア技法の有効性

国立病院機構 東京医療センター

本田美和子

シンポジウムの開催

(1) 第2回生存科学シンポジウム

(公益財団法人生存科学研究所、公益信託武見記念生存科学研究所基金共催)

平成26年12月13日 於：大手町サンケイプラザ 4Fホール

「未来からの反射」

基調講演：医の現在と未来

日本医学会会長・東京大学名誉教授

高久 史磨

講演1：疫病は警告する

日本渡航医学会理事長・東京医科大学教授

濱田 篤郎

講演2：認知症医療への期待と不安

東京都健康長寿医療センター理事長

松下 正明

講演3：出前医者が語る人生を支える医療

医療法人アスミス理事長

太田 秀樹

講演4：日本の医療の困った「忘れもの」

国際医療福祉大学大学院教授

大熊由紀子

(2) 市民公開講座「優しさを届ける介護技術 ユマニチュードを語る」

(公益財団法人生存科学研究所、独立行政法人 国立病院機構東京医療センター共催)

平成27年 2月22日 於：一橋大学一橋講堂

基調講演：ユマニチュード

Gineste・Marescotti 研究所 所長

Yves Gineste

公開座談会：「日本の看護師・介護士が語る現場からの報告」

郡山市医療介護病院看護部長

宗形 初枝

郡山市医療介護病院看護師

遠藤 淳子

郡山市医療介護病院介護士

香山 壮太

静岡大学情報部

石川 翔吾

(3) 国連防災世界会議

(いのちを守る森の防潮堤推進東北協議会主催、公益財団法人生存科学研究所共催)

平成27年 3月17日 於：仙台市情報・産業プラザ多目的ホール

開会の辞

いのちを守る森の防潮堤推進東北協議会会長 日置 隆道

第1部：基調講演1

子どもたちの脳を育む森づくり

日立製作所フェロー・生存科学研究所理事 小泉 英明

“「私」が生きる”のが生物

東京工業大学名誉教授 本川 達雄

第2部：いのちを守る森づくり

東北被災地の海岸林再生とふるさと復元

横浜国立大学学長 鈴木 邦雄

コンクリート防潮堤と森の防潮堤

立命館大学環太平洋文明研究センター長 安田 喜憲

森里海連環学の課題「いのちのふるさと海と生きる社会」

京都大学名誉教授 田中 克

三五の森の防潮堤「南海トラフ地震に備えて」

株式会社三五 安全・環境部 高野 薫

第3部：岩沼市「千年希望の丘」という挑戦

「千年希望の丘」プロジェクトについて

岩沼市長 菊地 啓太

「震災学」から見た「千年希望の丘」

東北学院大学副学長 佐々木俊三

閉会の辞 公益財団法人生存科学研究所理事長 青木 清

学術誌「生存科学」の発行

(1) VOL. 25-1 2014

(2) VOL. 25-2 2015

3. 一般的運営について

本年度の自主研究は①医療政策研究会、②地域口腔医療研究会、③患者・医療者・社会の権利に附随する諸問題について考える研究会、④先端医療技術倫理研究会、⑤「代替医療と語り」研究会、⑥高齢者・障害者のユニバーサル・ヘルス・ケアと福祉・社会保障の研究、⑦動物の社会構造における精神疾患関連行動の意義、⑧児童虐待に対するソーシャルワークの国際比較研究、⑨自然を活かした防災・減災の研究、⑩社会歴史文化的要因を背景とするソーシャルキャピタルとwell-beingに関する研究、⑪資本主義研究会の合計11件が活動した。各研究会は活発に行われ、外部研究施設との交流も盛んであった。

助成研究も(1) 心臓および心臓病に関する研究、(2) 認知症・介護における心理社会的研究の2つのテーマにつきホームページによる公募を行い、それぞれ4件、7件を選考した。

シンポジウムは公益信託武見記念生存科学研究基金との共催による第2回生存科学シンポジウム「未来からの反射」独立行政法人 国立病院機構東京医療センターと共催し、市民公開講座「優しさを伝えるケア技術 ユマニチュード」、いのちを守る森の防潮堤推進協議会と共催で、「森の防潮堤推進シンポジウム」を開催した。それぞれのシンポジウムは現在日本社会が抱える問題と直結しているため、反響が大きく、「生存科学」という概念の社会への浸透がさらに進んだ1年であった。

「生存科学」概念の構築に欠かせぬ「武見太郎人と学問」に記載される参考文献資料の散逸を防ぐため、資料のデジタル保存も実施した。

学術誌「生存科学」は会員のほか、国会図書館、全国医学部図書館など公共性の高い機関に無料配布、メディカルオンラインへ登録し、各大学図書館からのアクセスを可能にしている。また本研究所のホームページでも創刊号からの目次が閲覧可能である。